

放置されてきた森林資源の活用を 炭との素朴な関係に、未来がある

作家・イラストレーター 遠藤ケイ

平成二十三年三月十一日、東北地方三陸海岸一帯を襲ったM九・〇の大地震と、それに伴う未曾有の巨大津波は、多くの人命を奪い、広範囲の町や村を壊滅させた。

そしてさらなる悲劇は、福島第一原子力発電所の事故を誘発し、大量の放射能を海と大気中に放出してしまったことだ。これまで世界で唯一の核被爆国だった日本が、加害国になった瞬間だった。ある説によれば、今回の原発事故による放射能障害の「総量」は、広島原爆の二十九・六個分に相当するといわれる。

放射能被害については、専門家に譲るとして、この事故によって、原発の廃止と再生可能な自然エネルギーへの転換論議が一気に沸騰した。

もう一度、火力発電や水力発電に戻ることができるのか。太陽光発電、風力発電、地熱発電など自然エネルギーの可能性はどうか。もつと時代を遡って、薪や木炭の暮らしを復活させられるのか。そもそも、自然との共存、共生の方策というものがあるのか。

家庭用燃料をまかっていた炭

ここでは木炭について考えてみたい。

そもそも木炭とは、「木材を蒸し焼きにして作った燃料」をいう。

木炭の特徴は、一に、薪や石炭に比べて煙を出さずに燃える。二に、火つきがよい（発火点が三〇〇〜四〇〇度で、石炭、コークスに比べて約二〇〇度低い）。三に、高温の熱が得られる（一グラムあたりの発熱量が七〇〇〇キロカロリーで、薪の倍近い）。四に、灰が少ない（石炭、コークスの十分の一）。五に、燃焼ガス中の硫黄分が少なく、無臭であること等々、手軽な燃料として非常に優れている。

日本では昭和三十年代ごろまで、年間二〇〇万トンの炭が作られ、家庭用燃料の八〇パーセントを占めて

日常生活では、原発の停止で電力不足に陥って節電が叫ばれると、従順な日本国民は、夏のクーラーを切って扇風機や団扇や簾を出し、こまめに電気を消して回った。この冬は、石油ストーブが売れ、薪ストーブや炬燵、火鉢、湯たんぼなどが見直されている。

さて、ここからが問題である。

いままで「オール電化、オール電化」といって、電力消費を押し進めてきた国と電力業者が、手のひらを返すように「節電」だ、「エコ」だと呼び、さらには「足るを知る」古き良き日本人の美徳を説く厚顔無恥さともかくとして、文明の便利さに馴れさせられた現代人に、果たして昔の不便な暮らしが永続的にできるのだろうか、と心配になる。

いた。炊事、暖房用として生活の必需品で、コンロや火鉢、囲炉裏、炬燵に炭が入れられ、暖をとるほかに、鉄瓶の湯を沸かしたり、煮炊きの鍋をかけた。子供たちは、おやつにカルメ焼きを作ったり、餅を焼いたりした。少ない炭で高温の熱が得られる七輪も、調理に活躍した。

炭は、子供でも簡単に扱える燃料で、私などは小学校に上がる前から、家中の炭を熾こして回る仕事をまかされていた。夜に灰をかぶせておいた火鉢の炭が、朝に灰を搔くと炭が赤々と熾きた。たくさん残った炭火を消し壺に入れ、酸素を遮断して消し炭にした。「親父入れるよな火消し壺、怒る（熾こる）たんびに蓋をする」などという、ませた戯れ歌を口ずさんだりした。

消し炭は柔らかくて、すぐに火がついた。それを硬炭に移していく。うまく火が移っていく、炭のくべ方を自然に覚えた。炭は、夏は下から、冬は上から熾こすということも、母に教えられた。

朝の静寂の中、キンキンと音を発しながら炭が熾かしていく様子が、子供心にも気持ちよかった。

ブリキ板を円錐形にした炭熾こしや、蛇腹式の小型